

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四 八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二一五三・〇七〇七

『揺れる情(こころ)』通信⑬

稲荷山武田病院院長 土屋宣之/京都医療センター緩和ケア創設者

本居宣長さんは「情(こころ)」の曖昧な不安定な感じ(うき)を知っていました。そしてこれを本当に納得させてくれたのは『源氏物語』であつたと言っています。さらに『源氏物語』は「ひとの情(こころ)のあるやうを記し」、「くもりなき鏡にうつして、むかひたらむがごとくに『もののはれ』を記している」と言っています。

この迫真性が『源氏物語』による開眼だったのですが、自分の不安定な情(こころ)のうちに動揺したり、人々の言動からひとの情(こころ)の不安定を推知したりしている普通の世界の他に「ひとの情(こころ)のあるやう」を三挙にまざまざと直知させる世界が宣長さんに啓示されたのです。宣長さんは「ひとの情(こころ)のあるやう」(揺れるこころ)が直に心眼に映じてくる「道」があるとも言っています。宣長さんはこの感(うき)情(こころ)を見る心眼を獲得したのですがこの心眼を獲得する「道」があることを強調しています。

京都文化博物館

11月23日〜R7年2月2日

《世界遺産 大シルクロード展》

東洋と西洋を結ぶシルクロードは、ユーラシア大陸を横断する重要な交易路です。古来、多くの人や物資が往来し、その要衝には多様な文化が花開きました。

本展は2014年にシルクロードがユネスコの世界遺産に登録されてから、中国国外で初めて行われる大規模なシルクロードの展覧会で、中国の洛陽、西安、蘭州、敦煌、新疆地域などで発見されたシルクロードの遺宝を紹介します。

金銀宝飾品、青銅器、ガラス、陶磁器、壁画、絵画、染織、経典、仏像など、日本初公開を含む約2000点の作品を通してその悠久の歴史をお楽しみください。

《若いつもりで…》

常楽臺住職 今小路覚真

つくづく体力の衰えを実感させられます。かつてはラッシュアワーの駅構内であろうと、混雑を極めた四条河原町や新京極の雑踏の真つ只中にあつても、周りの人に歩いて追い越されることはまずありませんでした。

むしろ人を掻き分けるように、あるいはくぐり抜けるようにして追い越していったものです。ウインドーショッピングなどで立ち止まったりゆっくり足を進めている人が邪魔に感じたりしていました。所用があつて自宅からJR京都駅まで歩きました。1kmたらずですが、道は比較的人通りがありました。わたしにとつては普段通りの歩幅で、速度で歩いていました。一人、二人とわたしは追い越されました。おや、と意識して歩む速度を少しあげました。また次ぎ次ぎと追い越され、前の人に追いつかうと歩を進めました。逆、逆に離れていくばかりでした。年を重ねることをしみじみと教えられました。

《バルサミコ》

イタシヨク 福村直

バルサミコはイタリアを代表する調味料の一つで、日本ではバルサミコ酢とも呼ばれブドウを原料とした黒酢です。その始まりは1000年以上前と言われ、モデナの王侯貴族の間でひそかに造られ、それぞれ秘伝の味があつたと言います。熟成の若い物は酸味。古いものは甘味が特徴です。鎮静剤や鎮痛剤、薬用として評価が高く、また媚薬としても使用されました。ブドウ品種は主にワインと同じくトレヴィジアノー(アルマニヤックとコニヤックの原料)を主に用い、大鍋に移され50〜70%になるまで煮詰められます。その後オークやクリなどの木樽で熟成されますが長期熟成をすると最終的に1%ほどしか残らず、100ccの小瓶で3万円以上する非常に高価なバルサミコに変貌します。しかしメーカーによっては更に高価な50年熟成、100年熟成も秘蔵バルサミコとして保管しています。

健康レシピ 栄養士

國松美也子

《11月のレシピ》

朝晩気温が下がり、空気も乾燥して風邪をひきやすい時期です。食欲の秋なので、旬の食材を食べてしっかり栄養をつけましょう！

- ① 鮭の幽庵焼き(4人分)
生鮭4切れ、ゆず輪切り1/2、漬けダレ(水100cc、料理酒200cc、濃口150cc、みりん50cc)を、料理酒200cc、濃口150cc、みりん50ccを、漬けダレを鍋で一度沸騰させて、パットやタッパで冷めます。
 - ② ①に鮭を入れてゆずを並べ、上にキッチンペーパーをのせて40分ほどおいて漬け込む。
 - ③ フライパンにサラダ油をひき、②を取り出して汁をキッチンペーパーで押さえてフライパンに並べて蓋を閉めて4〜5分両面焼き色がつくように焼く。*焦げないように注意！
- ☆鮭に含まれるアスタキサンチンやDHAなどの栄養成分には、美容や健康に効果的なものが多いです。
- 免疫力UP、記憶力UP、老化防止に効果的です！

《大原流声明雑話②》

實光院住職 天納玄雄

以前、後白河法皇に天台声明を伝授した家寛の話を書いた。彼が天台声明初の譜面集を編纂して、院に献上したのは西暦一七二二年のことであつた。ただし当時は譜面があつても、あくまでメモ程度のものにすぎず、師匠から唱え方を伝授され、身につけなければ正しく唱えられないとされていた。こうして口伝重視で声明の音曲が伝えられた当時、その音曲は伝言ゲームのように少しずつ変化していった。家寛の声明集編纂からわずか六十年ほどで、大原流は古流と新流という二つの流派に分裂してしまっている。結果からいえば、湛智の提唱する新流が大原に残り、古流は青蓮院を中心として細々と継承された。そののちも度々こうした分裂が繰り返されて現代の天台声明に繋がっているのである。